

岡山・広島・岩国

俳句倶楽部

令和八年八月作品集

比治山公園 陸軍墓地 亜矢

陸軍墓地は、一八七二年、比治山南部に作られました。その後、現在地に再建され、二〇一九年広島市により整備されました。ここには、西南戦争から第二次大戦までの約三五〇〇基の墓石と、多くの慰霊碑があります。私は、梅雨明けの翌日訪れました。比治山は、私にとって身近な山の一つです。

七月や日の当りたる手水鉢

アスファルトにゆつくり落つる夏落葉

夏の蝶陸軍墓地へ飛びゆけり

墓石にかかる蜘蛛の巣軽く揺れ

景桜の影に陸軍兵の墓

すぐそこ夏木の鴉よく鳴けり

炎天や国旗音たてなびきたる

ひとつづつ碑を見る真夏かな

墓地にある石のベンチの灼けてをり

陸軍墓地日傘同士のすれ違ふ

《作品鑑賞》

知佳子

戦死者の方、現在まで墓地を整備し整えている方、そしてその方達に思いを寄せる作者もまた尊く思います。

七月や日の当りたる手水鉢

やりきれない日射しの中、手水鉢を日々手入れし整える方、墓地を掃除してくださる方達への作者の敬意を感じます。

夏の蝶陸軍墓地へ飛びゆけり

時の止まったような墓地に、昆虫や草木など生き物は息づき、人の生死も大きな自然の中のかげがえのない一部と感じさせてくれます。

ひとつづつ碑を見る真夏かな

炎天の中、丁寧に慰霊碑を見て歩く作者。埋もれたり読みにくくなった碑文に時の長さを感じ、慰霊碑を建立した方、守る方達と 생각이繋がります。

陸軍墓地日傘同士のすれ違ふ

面識のない人との出会いですが、共にこの地を訪れ、死者を悼み、平和を願う心に響きあうものがあります。

拾ひ来て寝静まつたる燕の子

燕の子羽とどのひて帰りけり

燕の子に使ひし箸を洗ひけり

葉桜のどこかを打てる雨しづく

とまるかと指出してみる夏の蝶

初蟬に池まんまんと水湛ふ

地に上着置けば近寄り青蜥蜴

すいつちよに時に日翳る日和かな

あたりには古墳いくつも誘蛾灯

山に住む人を思ひて岩魚釣

江ノ電に近く暮らして水を撒く

味噌蔵の裏に重なり杉落葉

蓮の花見せたかつたと友の言ふ

星涼し友とビートルズを歌ひ

下野のどこまで続く青田かな

日光に着くなり老鶯鳴きにけり

石垣の角を曲がれば風涼し

夏苗備北の丘に立ちをれば

朝なさを足を濡らして水を打つ

朝蟬の鳴く頃けふの散歩終ふ

夏休みは吾もよ朝寝してをりぬ

隣家の軒より飛べり夏燕

一万歩しつかり歩き夏の朝

昼寝してぼちぼち夕餉の支度かな

サンダルの跡くつきりと子らの足

百日紅散らしてゆけり宵の雨

木の匂ひ草の匂ひや涼新た

盆の客帰りがらんと座敷かな

ゆらゆらと明けてくる空秋の蟬

急カーブして一面に葛の花

佐保光俊

高尾ひとみ

あぐみ

大盛りの夫の白飯土用かな

波打つて流るる川や夕涼し

夏草に触れて駆へと歩きたる

夏の風道の真中に猫座り

目の前に蜻蛉とどまる涼しさよ

あぢさるや馴染みの飯屋用店す

夏掛の上に大の字夫眠る

昼寝覚母の帰宅の音のして

緑蔭にホームベースの描かれをり

たて続けに電話のかかる晩夏かな

亜矢

手花火や甥つ子種火分けくれし

揚花火最後のひとつ惜しみけり

金風や淡海の波も煌めける

沖島の秋は三輪自転車で

とりどりの漁網干されて秋日和

秋の湖筋蝦そつと掬はんと

久にして子と肩ならべ流れ星

すれ違ふ明日香のひとの爽気かな

石舞台馬子も紅葉愛でたるか

花野道行けば飛鳥の棚田かな

綾乃

曖昧な夢の残りて夏の朝

夏暁や窓の眺めに音の無く

動き出す気配も見せず夏の雲

草叢を舞うて夏蝶隠れけり

夏蝶の地に群がれるあやしきよ

瑠璃鳥か枯山水に聞き入りぬ

浜歩き素足に触るる鱗小波

風鈴が祝詞に混ざり天神社

夕蟬のいつまで鳴くか盛んなる

モヒートに話は尽きず夜半の夏

井藤希

朝の庭薔薇一輪を夫見つけ

故郷の山懐に河鹿聞く

休田の向日葵にみな集ひけり

階段を上つて父母の墓参

ほみなれし街を見下ろす墓参かな

孟蘭盆会家族で散し鮎を食ふ

親劇の帰りの空の盆の月

明け方の無花果摘んで朝餉とす

庭先の無花果嫁に持たせたり

夜もすがら床の虫の音聞いてをり

蹴飛ばすをためらふ色や梅雨茸

鉄門にまたも零れて凌霄花

ひとところ夏雲傷いて瀬戸の海

夏の暁この辻いつも風吹いて

親子連れとあいさつ交はす道涼し

風鈴を吊るせば吹いて海の風

端居する縁にいつもの山の風

地震ありし地の炎日をおもひけり

本読むをひととき止めて遠花火

歳重にも真白きテント広島忌

初蟬をもつと聞きたく窓開くる

溝浚へ空家ばかりの村となり

僅かな田男は継がぬと決めし夏

母の畑よくぞ射干残りをり

街灯に照らされ飛ぶ蛾見てゐたり

八十路過ぎ今日も愉しき金魚玉

蟬時雨ときをりはたと止みてまた

山荘の夏暁男は世を刈る

夏鳥の声に双眼鏡さがす

花木僅バス待つ皆が見てをりぬ

大畑恵

暁子

すみれ

新緑や幼なじみの漫才師

夏めいて埋没林の幹太し

夏霞少女はわざと目を伏せて

駅前のタクシーの列明け易し

職場へと差し入れられて杜若

向日葵のあひだを抜けて現場へと

電停は白線のみや日の盛

講演のあとの打ち上げ夕焼空

海岸のガラスを拾いソーダ水

サヌカイト埋まる大地や雲の峰

児童らの平和の誓い夏の雲

蟬時雨の真只中に黙禱す

歩む人皆それぞれ扇風機

バスタオルたちまち乾き雲の峰

捨てきれぬ物積んでをり大西日

包丁の入れどころ無し大南瓜

飯粒も残さず食す生身魂

秋澄むや魚ひらりと翻る

飛行機雲いくつも伸びる秋気かな

流灯のしばらく岸を離れざる

初夏と書く母の習字のやさしさよ

ベッドに寝る母に団扇の風送る

中庭に今日も来て居る燕の子

半年ぶり母連れ帰る青田道

青田道小学生の下校せり

あの櫓に吊つて乗りたきハンモック

田草取終へ母が家に戻りけり

農作業終へ夫と飲むビールかな

洗濯をちよつと干すため夏帽子

夏帯をゆるりと締めてクラス会

竹田千絃

知佳子

ちどり

ブラインド広げて見たら夏の海

栈橋の軋む音して夏つばめ

青景風バスは見知らぬ町を過ぎ

借景の山の静けさ夏の園

初蟬や朝風通す窓を開け

葛切のひらりと透けて昼下り

猛暑日や大きく曲がる川に向き

猛暑日の屋上クレール動きをり

大花火揚がりて空の広くなる

望まざる一人の暮し夏の月

辻純江

陰に飛び日面に飛び夏の蝶

私は菫の花の天ぶらが好き

病み上りの母の手をとり螢狩

二階から燃ゆるごと見え夾竹桃

今年また折鶴を折るこの夏よ

冷房の平和の部屋に鶴を折る

熱帯夜太鼓の音の消えてより

大中小どれにしようか瓜を握ぐ

大暑を凌ぎ夫は米寿を迎へたる

夫米寿祝ひの花火所望したし

雲雀

孵卵器で生まれし子なり初夏の小屋

梅雨寒やニュースと同じ駐車場

獣道白き紫陽花生い茂り

緑陰にギリシャ国旗のレストラン

薰風や臍の緒揺るる牛の乳

炊蟹へ打たせ湯跳ねし水しぶき

銭湯の寝蓐座に古き脱衣籠

フロントの人は慣れたる螢かな

星空の谷間は黒し螢飛ぶ

対岸の遠くにいつも螢かな

ふじ女

二階まで飛んで消えたるしやばん玉

砂に筋引いて歩ける小蟹かな

声色をいろいろ変へて油蟬

ひとしきり鳴いて飛びたる油蟬

昼寝子の寝息聞きつむすび食ふ

少しでも軽く大暑の旅靴

炎昼のプラットフォーム鳩鳴いて

岩清水音を立てたる夫の喉

し残してきた事多しソーダ水

いなづまが遠く近くの上

病室の窓を打ちたり金亀虫

冷房は母に令はせて弱めとす

痰吸引終へて消灯熱帯夜

夜鷹鳴くやうなるナースコールかな

看護師の懷中電灯夏の夜半

妹と交替の夜の明易し

蟬の声静かな今朝ぞ母逝ける

まだ温き母に帷子着せやれり

広島忌今年はひとり黙禱す

母の冥福祈り燈籠流したる

小流れの光の映る青楓

夏の蝶大樹を越えてなほ高く

瀬戸内の海霧に隠るる巖島

よき風を通す茅の輪の社かな

朝市はみな地の野菜土用入

もう君は初蟬鳴くを知りをるか

下駄箱の半分は妻黴の靴

朝虹の四十九日の散歩かな

独り寝のツインベッドや夜の秋

散水の庭を回りて赤とんぼ

松田裕子

村上正人

森口良樹

ここもまた朝の光や茗荷の子

花苔や指輪嫌ひのこの私

夕風や母の庭にも花擬宝珠

夕間暮れ千日紅のなほ紅く

暮れてなほ雨音づく鮎の膳

まどろみに広がってゆく蟬の声

真ん中に風蘭を置き卓囲む

街角の人影まばら今飲の花

真つ直ぐに夕焼へ向かふ一人かな

朝の窓開ければどつと蟬の声

水羊羹舌にころがし飲み下す

仙人掌の針の隙間に小さき芽

駅までを日傘目深に昼さがり

人影のしばし途絶えて道灼くる

家中のカーテンを引き大西日

遠雷の近づく気配夜の闇

夕立のすみずみまでを叩きをり

三伏や蛇口より湯の逆り

岬への一本道や夏始

鳥渡る島の朝焼ながめをり

町を抜け坂を下れば夏の浜

遠くには貨物船行く夏の浜

朝食のここまで聞こえ蟬の声

海の日のアンモナイトに触れてをり

水槽の山椒魚の目の開く

出てみれば屋根を照らして夏の月

吾子の手の線香花火一本目

今井淳子

藤堂暢子

土肥律子

桜花の今年もそこに咲きにけり

出勤に向かふ朝日や梅雨明けて

夾竹桃フェンスに沿うて咲き揃ふ

今日からは水着を持たせ子を送る

藤園忌継の一字や蟬時雨

面外し熱ほどけ出づ夏稽古

帰路につきまた一樹あり令歎の花

梶の景の謂れを聞いて星思ふ

鶺鴒を信子待ちに今朝も見る

あちこちに門番めいて女郎蜘蛛

蛸や里に流るる夕餉の香

山際に赤く大きく盆の月

秋澄むやまつすぐ伸びて飛行機雲

外来魚釣る湖の秋夕焼

父に似る弟の背ナ秋の田に

腰伸ばし寺の鐘聞く秋収め

父の乗る満員電車秋の暮

胸突きの階上り来て初紅葉

帰省子の揃へられたる大き靴

墓園より街並望む炎暑かな

異国語の行き交ふ橋や原爆忌

幾つもの橋の袂に夾竹桃

山の端に微かな音や揚花火

夫の忌に大好物の無花果を

干し物をパンと叩くや空高し

なつ

山野ウタ

大原良子

遠花火漢字ナシクロむづかしき

新涼やページをめくる指白し

こほろぎの声のしてゐる雨後の朝

朝顔や尼僧の読経つづきをり

病院の七夕竹に手を合はす

女郎花風の音にも零れけり

秋風を訪ぬる人と思ひけり

前田範子

幼子のプールの遊びきりもなし

砂日傘潮風耳を渡りけり

日焼せし夫をつくづく眺めをり

門前に水の打たれて静かなり

つくつくし鳴き終へてまた鳴き始む

盆の月向うに見えて橋渡る

桑門わかこ

劇場を出れば真昼や夏芝居

蟬の翅一枚浮かぶ水溜り

新涼や魚影留まる橋の下

繋がりの分からぬ墓も参りけり

小さき墓ひとつひとつに参りけり

八月や母の白寿を祝ひるて

撫子

夫の浴衣を孫に着せ丈足らず
茗荷の子さがす指先細きかな
河鹿鳴き里山徐々に更けてゆく
胡瓜揉み旨し旨しと朝餉かな
一音に読経の響く夏木立
乾杯は孫の発声ビール飲む

美耶

日傘差しランドセルの子駆け抜くる
暑氣払ひ少し遠出の銭湯へ
姉妹でランチバイキング暑氣払ひ
花道を戻る力士や汗光り
遠雷にスニーカー洗ふ手を止むる

桜陽

目の前の壁に蝉鳴く今日の朝
炎昼のいつもの道の長さかな
縁側に西瓜の種を飛ばし合ひ
盆休み笑ひ笑つて夜の更くる
秋の虹車窓に見えて声上ぐる

やす保

マントラの聞こえてきたる夏の朝

万緑を映して流れ仁淀川

よきこいの踊り子の目に汗の沁む

励ましの音にも聞こえ揚花火

赤蜻蛉すいと横切る朝まだき

和田史子

浅瀬では白鷺の子と戯れて

白鷺の相生橋を越えてゆく

朝顔の今年は白の多く咲き

蜩の声の近くに猫の居る

上島康子

海越えて故郷に着き青田風

朝市の間口半間烏賊並ぶ

向日葵へ少年の弾くりストかな

四阿に句集の置かれ三の滝

高嶋朝代

蟬しぐれ雨戸を緑れば入り来る

鐘の音黙禱の黙原爆忌

炎天下人影途絶え静かなり

じりじりと炎天の道影映す

民

翡翠の後を尾ければどこまでも

寝冷の子アンパンマンの腹巻す

冷麦の三人前を一鉢に

炎天の野球の子らに水運ぶ

みさ子

水面掻き四角のプールで汗をかく

二人して灯笼飾り迎へ盆

生ぬるき風に向かひて鬼蜻蛉

上條忠

海棠の花は秘かなピンク色

窓越しに牧草の露ひかりをり

夕暮の風は秋風日の暮るる

紀英子

荒草の中より伸びて百合の花

翻る鳩の白さも広島忌

榎櫨の実落下注意の宿屋かな

熊谷ゆり子

バス降りて街路の灼くる風を受く

山の端の夕焼が好き郷が好き

二杯目の紅茶を飲んで夜の秋

志路猿

ふはり来てまた吹かれゆく系とんぼ

水槽に街の灯映り熱帯魚

電線に揃うてよりの帰燕かな

森田敦子

妹背の滝素足に砂利の心地よき

ずぶ濡れの子を抱きかかへ妹背の滝

滝の音声にはならぬ願ひごと

山崎桂子

あつばつば来て動く母思ひ出す

隙間より入りし西日を避けてをり

古川廣子

向日葵に励まされては前を向く

無花果やともに歩みし日々のこと

弥生

令和八年七月度作品集より

亜矢 私の選んだ十句

梅雨寒の風入れ酔ひを覚ましをり
大花火夫の横顔金色に
マティーニを指で混ぜたる夏の庭
手から手へ渡すビールやスタジアム
膝抱き見上げてをりぬ夏の星
夕暮の五橋をくぐり夏燕
目の合うて葉先に動く雨蛙
空蟬にゆるりと朝の風の吹く
百日紅咲き満ちてなほ咲き始む
新宿の路線図見上げ夏の旅

佐保光俊
綾乃
井藤希
曉子
知佳子
森口良樹
高嶋絹代
撫子
美耶
熊谷ゆり子

知佳子 私の選んだ十句

燐る船見届けて去る夏の浜
見るたびに紫陽花の色確かむる
朝蟬の声に目覚めて良き日かな
とまり木にただ居るインコ梅雨の入
しみじみと齒茎よろこぶ鰻食へば
手から手へ渡すビールやスタジアム
黒揚羽厨の方へ我もゆく
青麦や球技大会ある職場
潮騒を耳に眠れる夏の宿
汗の染みし妻の枕や夜の桃

佐保光俊
高尾ひとみ
あざみ
亜矢
綾乃
曉子
すみれ
竹田千紘
雲雀
森口良樹